

【ショートレター】

看護未経験者に対する看護ケアの重要コンピテンシーの引き出し授業とその成果†

竹内 佐智恵*

三重大学大学院医学系研究科看護学専攻*

三重大学が開催した学問探究セミナーに参加した看護未経験の高校生のうち 21 名を対象に、「専門職未体験の高校生に実施したオンライン下での事例提示とそれに続く専門知識の提示がもたらした看護のコンピテンシーの気づきの傾向を明らかにする」を目的として解析した。事例を提示した後のホワイトボードへの書き込みの分析の結果、看護ケアの思いやりにつながる可能性のある同情や共感という感情が示された。その後の専門知識の提示は受講生の患者解釈を深化させ対応の提案を導き出した。ホワイトボードでの意見交流の場は意見の提示を促進し看護のコンピテンシーの関する個々の気づきを促進したことが示唆された。

キーワード：看護未経験者，看護，コンピテンシー，感情，動機付け

1. はじめに

少子化において予想される大学全入時代を見据え学生の主体性をいかに高めるか(村上 2009)は高等教育の重要課題である。三重大学では主体性の基盤固めとして、高校生に大学での学びに関心を抱いてもらうことを目的として、高大接続の一環で大学の授業を実際に体験できる「学問探究セミナー」を開催している。今回、筆者は看護において『「みえない健康状態を探索する」という体験を一緒にしてみよっか・・・』のテーマで講師を体験した。そのなかで高校生が講義中及び講義後に示した書き込みに看護の主要なコンピテンシーが網羅されていた。ここから初学者に対する看護教育の有り様の示唆を得たので報告する。

以下に「専門職未体験の高校生に実施したオンライン下での事例提示とそれに続く専門知識の提示がもたらした看護のコンピテンシーの気づきの傾向を明らかにする」ことを目的とした分析結果を示す。

2. 方法

2.1. 調査期間および対象

セミナーは2023年8月24日13時30分から1時間30分Zoomを使用した授業(以下、オンライン)を実施した。受講生はその後大学からの質問紙に回答するシステムであった。

受講者は26名であり、21名からアンケートが回収され、これを分析対象とした。内訳は高校1年生4名、2年生6名、3年生11名。全員が看護または身体に関心をもって本セミナーを受講していた。

2.2. 授業の進め方およびデータ収集方法

授業では実存する脳梗塞の患者とその家族の事例を用いた。最初に患者の病状として、身体機能が低下している状況と鎮痛剤に誘発され出現するせん妄が常態化している様子を示した(図1)。同時にその患者を介護する家族が抱く葛藤や困惑、患者への感謝などの思いが交錯する



図1 授業で用いたスライド_病状の進行状況

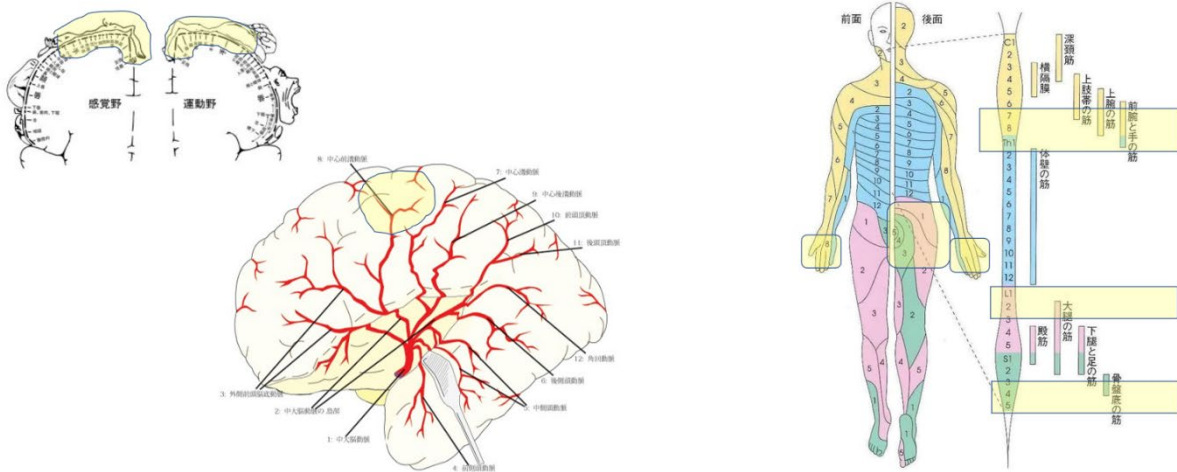


図2 脳梗塞患者の症状を理解するために必要な脳、血管、運動や感覚を伝える神経についての解剖生理学的な基礎医学の専門情報

様子を説明した。まずこの段階で受講生に、注目した点を問いかけた。

続いて患者の病状に関連する病態の専門情報を提示し(図2)、今後の展開を予想する思考を説明した。受講生が専門的な知識をオンラインでの閲覧のみではなく、図2を含む専門的な知識を示した資料を手元で見ることができるよう Zoom のチャット機能を用いて配信した。その上で図1を再掲し、同様の問いかけをした。問いかけへの回答をオンライン上で共有したホワイトボード画面に入力してもらった。参加者は1つのホワイトボードを実況的に見ることができ、自由に書き込みをした。書き込みは記入者の氏名が表示される仕組みになっており、講師である筆者は書きこまれた内容を見ながら記入者の氏名を呼びかけ、問いかけを加えてさらに詳細に書き込むよう促した。

2.3. 分析方法

受講生らがホワイトボードに書き込んだ看護的観点をエクセル内に一覧化し、類似性に基づき分類し特徴を示す用語を付記した。

3. 結果

3.1. 受講生の事例の受け止め

受講生は授業の冒頭で患者とその家族の状況を写真と説明で知った。その直後の書き込みの分析結果を表1の白地に示す。受講生が焦点を当てた対象は、説明に登場した患者、家族の他、愛犬が網羅され、さらには患者とそれらとの交流の様子にも目を向けていた。捉え方は、対象に対する自身の感情を投影させ「寝たきりの状態になってしまった」「筋肉が衰えてしまった」「かわいそう」とい

た共感や同情のほか、「できなくなっているが積極的」「素敵だ」「大切だ」という賞賛する表現で対象の強みに目を向けたものが含まれていた。また、事例紹介には含まれていなかったが、「少しでも長く生きようと思えるのではないか」という患者が生きようとする意思を持っている様子や「痛みをとるためには痛み止めを使わないといけなくて、でも、使うと認知症が進行してしまう。どっちをとるかが難しいんじゃないか」という家族が鎮痛薬の使用に逡巡している様子を推測するものも存在した。

続いて、病気に関する病態の知識や疼痛の機序に関する生理学や解剖学の知識を提示し、再び書き込みの機会を設けた。その際の書き込みには「便秘を少しでも解消するよう痛みのない程度にマッサージをする」「ずっと同じ角度では同じ部分に負荷がかかるので数分おきに体勢を変える」といった身体機能の維持、促進、機能低下の予防、さらに「食事の際の飲み込みの状態から脳梗塞の拡大を推測する」といった変化する機能の早期発見に関する提案が見られた(表1, 灰色地)。

4. 考察

4.1. 看護の経験をもたない高校生が看護のコンピテンシーに気づく可能性

今回の受講生は看護の経験を持たない高校生であったが、事例の紹介後の書き込みにも患者への同情や患者への対応に苦悩する家族への共感的な感情投影と焦点を当てた対象への賞賛があった。対象に向けられた同情や共感、ケアを提供する際の思いやりと共通するものといえる。Adamson and Dewar (2015)は看護学生を対象として、臨床現場で収集されたストーリーを学生に視聴する機会を設定しそれらを実際の自分の経験と関連付けるよ

看護未経験者に対する看護ケアの重要コンピテンシーの引き出し授業とその成果

表1 受講生が提示した事例に対する受け止め		n=21		
焦点対象	焦点対象の捉え方	捉え方のタイプ	記述例	
患者	機能低下を目の当たりにしながらも意欲を持続させている患者を賞賛	賞賛	月日が経つにつれ体が動かなくなってきている。でも自分でできることは積極的に動いている。	
	身体機能の低下への同情と支えてくれる人を持っていることへの賞賛		できることが減って不安もあるけど、支えてくれる友人がいて素敵だと思う。	
	楽しむ時間が生きる意欲を高めることを推測	推測	できることの範囲で何か楽しめるものがひとつでもあれば少しでも長く生きようと思えるのではないかなと思います(周りの方との会話など)	
	動物や友人の存在による癒しを得ていることを推測		犬や友達が存在が痛みが辛くても頑張れるのだと思う 他	
	機能低下を目の当たりにしている患者の落胆の推測と同情	推測, 同情	はじめは歩いていたのが病気によって寝たきり状態になってしまった。痛みを我慢するために使うことで筋肉が衰えてしまったことはかわいそう。他	
	安寧の提供		私は患者さんがカーペットなどの固いところに横になっているのが気になったので柔らかいクッションなどを下に敷いてあげたい	
	せん妄下の思いの実現を勧める	提案	幼稚園児と交流できる機会を作る 他	
	不自由ながらも自立しようとする患者の力を引き出す工夫に貢献したいことの表明		病気を患ってからも仏壇の花を愛でていたりしていたので、自分でできることが増えるように物とかを工夫できたらいいなと思いました。	
	予防的な対応を一緒にすることを提案		脳梗塞など、痛みで寝たままになってしまった体が固まらないように一緒にストレッチなどをしたい。	
	機能維持		運動機能の自立性の維持	患者さんの力でできることは見守ることに努める 他
	機能促進		食事動作：食事の自立性	食べる時に上手く口に運ぶことができるかが心配
	予想される機能低下の予防		嚥下：誤嚥防止	便秘を少しでも解消するよう痛みのない程度にマッサージをする(お腹周り) 他
			転倒予防	食べた後にベッドを起こしてあげると喉のつまりがなくなるし同じところに負荷がかからない 他
	予想される機能の変化の早期発見	腎機能低下の早期発見	寝たままでもできるマッサージや筋肉を動かすことを意識する 他	
		心身の変化の早期発見	定期的な健診：3, 4週間に1回くらい(膀胱が悪いと腎臓にも影響し、だんだん広がっていく可能性があるから、短期間で検診を受けると安心)	
疼痛緩和、疼痛の早期発見		表情の小さな変化に気づく 他		
脳梗塞の拡大の早期発見		ずっと同じ角度では同じ部分に負荷がかかるので数分おきに体勢を変える→椎間板が脊髄管に食い込みにくい角度(痛くない範囲で) 他		
	副作用、せん妄の早期発見	食事の際の飲み込みの状態から脳梗塞の拡大を推測する		
		痛み止めの副作用が大きいから、体調の変化を細かく観察し心のケアを大切にしたい		
家族	介護する存在を賞賛	賞賛	病気を患ってから介護してくれる家族がいることが大切なことだと思う	
	ジレンマ的思いへの推測、共感		痛みをとるためには痛み止めを使わないといけなくて、でも、使うと認知症が進行してしまう。どっちをとるかが難しいんじゃないかと思った。	
患者と家族の交流	介護する存在を賞賛	賞賛	日に日に体調が悪くなっていくのに対して、あたたかくサポートする周りの方が素敵	
	不自由な患者の生活環境を整えたことを賞賛		痛みがあって、動きづらい中でも生活していける環境を周りの人が作れたのかと思う。	
	患者の自立力をみ守る体制を提案	提案	自らやろうとしていることは周りはなるべく止めずに温かく見守る。	
患者、家族、愛犬の交流	動物の存在による癒しを得ていることを推測	推測	犬がいるから心が安定 他	
	動物 賞賛		賞賛	ワンちゃんの顔が突ってる

灰色地：専門知識提供後の書き込みへの分析から抽出されたもの

その他：事例紹介後の書き込みへの分析から抽出されたもの

う促した結果、思いやりの気持ちの醸成につながったことを報告している。また Kagawa et al. (2023) も医学科4年生の学生を対象として、患者の語りを聞く機会によって共感的な感性が向上したことを報告している。いずれの報告も対象は看護や医学の専門的知識をすでに有している人であったが、今回、類似した成果が高校生にも見られたことになる。対象は「身体や看護に関心がある」という主体性をもって参加していた。そうした受講生にとって、最初に関心が向いた内容は視覚的に入ってきた患者の様子であったと思われる。患者は自力で動いていた状態が時間の経過に伴い活動が低下し、やがて自力での活動が困難になってきている変化に衝撃を受けた。その反面で患者が仏壇への参拝を継続しようとする意志もっていることを知り、賞賛の感情を表現した人がいた。対

象のもつ強みを見出しそこに価値を付与したものである。この気づきはエンパワーメント、自己効力感、希望を促進するケアの根幹 (Gottlieb 2014) となるものといえる。

続いて、病態理解に関する特性について考察する。彼らは、高校の科目における生物や保健で、今回のテーマに関連する専門的な知識の一部は有していたかもしれないが、複雑な事例を理解するほどではなかったと思われる。その後、講義の中で事例を理解するために必要な詳細な専門知識を提示し、それらを実践するケアに活用する思考例を説明した後の書き込みをみると、運動機能、食事摂取機能、排泄機能に注目し、維持・促進・予防・早期発見の対応を提案しているものが見られた。つまりケアをパターンとして捉えるのではなく、高校生も知識に基づき各種機能の変化を予想したり、予防のために原因を低減さ

せる働きかけを思考する力を有しているといえる。

今回の授業では最初に事例を詳細に示し、そこから感じることを表現するよう促した後に病態等の知識をもとに改めて事例を理解する機会を設定した。つまり感情を刺激した後に理性を刺激する構造とした。Chai et al. (2017) は感情が学習にもたらす影響の解明に取り組んでおり、脳内の循環感情制御と認知制御が入れ子になった状態を見出し、これが奏功すると感情が記憶や動機を高める反面、状況によっては感情が学習を阻害することを提示している。今回、看護への関心をもち能動的な行動で学習の場に参加した受講生の多くにとって、感情の刺激は、その後提示された専門知識への関心を高め、主体的にその知識を活用して患者の解釈を促進したものと考えられる。

4.2. 看護未経験の受講生に対するオンライン授業の手法の意義

オンラインでの自由な書き込みも気づきの促進に寄与したと考える。

Gann(2012)は自身が委員長を務めるクリティカルシンキング SIG プログラムの会報で、ペタゴジー学習者にとって少人数でのディスカッションがメタ認知化へ導くものであれば、学習動機を高めるのではないかと投げかけている。今回のオンライン授業におけるホワイトボードへの書き込みは参加者が 26 人であり少人数学習の域を超えている。しかし、同時進行的に書き込みたい人の入力を促進した結果、短時間に参加メンバーの多くの意見を知る機会になったり講師とのやり取りを目の当たりにし、ある人への問いかけを自身への問いかけと受け止める機会になったと考えられる。すなわち短時間に仲間の意見に触れることができ、同じ分野を目指す他者の感性や意見を知る機会が競争的緊張を高める少人数での交流に類似した効果があったと考える。さらに発言に質問を加えて思考を深めることを促したり意見を集約した教員の働きかけが、メタ認知への欲求を刺激した結果であったと推察される。

4.3. 研究の限界と今後の発展性

日頃、看護学生に対して臨地体験の基礎力づくりや国家試験合格を目論んだ知の探究を主体としていた筆者にとって、このセミナーの振り返りは若い人の学び方について再考するきっかけとなった。

自由に記述する場面において人は自身の思いのなかで最も印象的なものを表現することを踏まえると今回の結果は今後の研究の発展への可能性に示唆を与えてくれたと考えるが、データは目的に基づき構成した問いから得

たものではなかった。また、全参加者の個々の気づきを統合すると看護のコンピテンシーが網羅されていたが、個々の気づきの広がり様相を捉えるには至らなかった。

今後、看護ケアのコンピテンシーの教育において、今回の結果を参考に、脳内の認知機能を効果的に発令できる教育デザインを検討し、探究していく必要がある。

5. 結論

専門職未体験の若者に対し、リアルな事例提示による感情の刺激、発言、そして専門知識による思考の統合の場を与える授業は感情と認知の効果的な相互作用をもたらす可能性があり、オンラインでの書き込みによる意見の提示は意見の集約において有益であった。こうして得られた高校生の気づきは統括すると看護のコンピテンシーを網羅したものであった。

参考文献

- Adamson E.,and Dewar B.(2015). Compassionate Care: Student nurses' learning through reflection and the use of story. *Nurse Education in Practice*, 15(3), 155-161.
- Chai M. Tet al.(2017). The Influences of Emotion on Learning and Memory. *Frontiers in Psychology*, 8.
- Gann D. (2012). Increased Motivation in Small Group Discussion through Humanist Pedagogy. *Critical Thinking Scan*, 3.
- Gottlieb L.N. (2014). Strengths-based nursing. *American Journal of Nursing*, 114(8), 24-32.
- Kagawa Y. et al. (2023). Using patient storytelling to improve medical students' empathy in Japan: a pre-post study. *BMC Medical Education*, 67.
- 上村智彦. (2009) .全入時代の教育の質の保証. 工学教育 57 (1) .

† TAKEUCHI Sachie* : A Report of the Lecture for Nursing - Inexperienced Persons to Explore Competencies of Nursing Care for a Stroke Patient

* Course of Nursing, Graduate School of Medicine, Mie University 2-174 Edobashi Tsushi, Mie, 059-231-5094 Japan